

## 「他国を知ろう、自国を知ろう」

ブルース・L・バートン

2002.11.5 放送

今回は、学校教育の中で日本の文化や歴史がどう扱われるべきかについて考えたいと思います。ご存知のように、文部科学省の諮問機関である中央教育審議会が、日本の教育方針を定める教育基本法の見直しを行っており、中間報告案がこのあいだ発表されました。

報告案の中身はいろいろありましたが、ここでは特に次の言葉に注目したいと思います。すなわち、「国際社会を生きる教養ある日本人は、自らのアイデンティティの基礎となる伝統、文化を尊重し、国や郷土を愛する心を持つことが重要」だという指摘です。「愛国心」という言葉こそ、誤解されやすいということで報告の最終案から外されたようですが、表現は別としてこの教育方針の狙いは、日本の子供たちに自分の国や文化を知り、日本人としてのプライドを持ってもらおう、ということです。

審議会のこの考え方は、ここ数年しばしば議論にのぼる、現教育制度に対する批判の流れを汲んだものと思われまます。たとえば、ご存知のように、去年「新しい教科書を作る会」というグループが、今までの日本史教育が自虐的な内容からなり、日本の良い点を子供たちに伝えないとして、日本史のプラス面を強調した教科書を作って出版しました。今回発表された文部科学省の新教育方針も、ある意味でこれと似たような狙いがあると言えるでしょう。

自分の国を愛するということは、大変素晴らしいことですが、行き過ぎは怖いものです。いかに怖いかということは、20世紀の歴史を振り返れば一目瞭然ですが、ここでは敢えて昔のことには触れません。それよりは現在のアメリカの状況を考えていただきたいと思います。私はアメリカに生まれ育ちましたが、このあいだ久しぶりに国に帰ったとき、その変身ぶりに大変驚きました。国旗を飾った家や車、愛国歌が流れるラジオ、ブッシュ大統領の武力行使や他国への威嚇をほとんど批判なく受け入れる国民やマスコミ。最近では、反戦のデモなども少しみられますが、全体的には大統領を支持する人が依然として多いのです。

米国民はなぜこのような偏った愛国心に心を奪われてしまったのでしょうか。もちろん去年のテロ事件が直接の引き金ですが、それ以前の問題として、自国や世界に対する理解が足りないということが挙げられます。米国民も他国や異文化に対して関心がないわけではないですが、大国であるゆえのプライドもあって、最終的にはアメリカのやり方や価値観が絶対的に正しいと思い込んでいる人が多いのです。テロ事件の後、こうした傾向がさらに進み、悪循環を呼び起こしているように思います。

日本も戦前今の米国のようなどころがありました。この半世紀以上、国際社会の一員として平和と相互理解の路線を歩んできました。日本国内にいる皆さんにとっては、愛国心やナショナリズムといった言葉があまりピンと来ないかもしれませんが、日本の文化や

社会は外から見れば依然として不透明で閉鎖的なところがあるので、日本人は実際、ナショナリストあるいは自民族中心主義者だと思われることが多いのです。ただでさえある、こうしたマイナス・イメージをさらに煽って、日本と世界との壁をこれ以上高くするような教育だけは絶対に避けるべきだと思います。

結局のところ必要なのは、今の米国にも言えることですが、学校教育を通して愛国心を教え込むものではなく、あくまでも自国および世界の事情に対する幅広い知識や理解を育成することだと思います。確かに、多くの評論家などが指摘するように、日本の若い人たちは自分の国の歴史や文化についてあまり詳しくはありません。私はたまたま日本の大学で歴史を教えています、クラスの中に海外留学から戻ってきた学生も何人かいます。その人たちに聞くと、海外にいるあいだ自分の国についていろいろ聞かれましたが、知らないもので何一つも答えられなくて恥ずかしい思いをしたと皆口を揃えて言います。そうした経験がきっかけに日本の歴史をきちんと学ぼうと決心して私の授業に参加してくれたわけです。

こうした学生たちを喜んで受け入れますが、実のことを言うと彼らはすでに留学という経験を通して私ができることができるどんな知識より大事なものをすでに身に付けています。それは、留学先の国に対する理解であり、同時に自国を客観的に見られる目であります。日本の歴史に関する知識はまだまだかもしれませんが、海外に住むことによって自分の国のことを恐らく生まれて始めて真剣に考えたでしょうし、現地の人たちと意見の交換ができたでしょう。また、自分のアイデンティティーにも目覚めてきたでしょう。

留学ほど有効ではないかもしれませんが、実は短い海外旅行でも、自分の国に対する理解を深めるきっかけとなることがよくあります。学生たちと話す、春休みや夏休みに、自分で稼いだお金で韓国に行った、タイに行った、ヨーロッパに行ったという話をよく聞きます。学生の中に、私などより遥かに多くの国に行っている人たちがいますし、こうした経験は必ず社会人となったときに本人にとっても日本にとってもプラスになるはずで

もう一つ見逃せないのは、今大量に日本に来ている外国人留学生の存在です。我が校でも数百名の留学生が常に来ています。中国から来ている人が一番多いのですが、その他に韓国、タイ、インド、バングラデシュ、オーストラリア、米国、イギリス、カナダ、ロシア、チェコ、ペルーなど、実に多くの国から来ています。

留学生は皆、日本に興味があるからこそ来ているわけですが、日本人学生は彼らと一緒に学び、遊び、話し合い、時には喧嘩するという経験を通して、お互いの考え方や価値観を知り、教室で得られない主体性や相互理解を得ることができると私は確信しております。

このように私は自分や自分の国を理解する最も有効な方法は、海外に行くなり、日本に来ている外国人と話すなり、日本以外の文化に触れることだと考えています。自分の国や文化に対する机上の知識を持つことはもちろん重要ですが、他国に対する理解もなければ、その意味が見えてきませんし、偏った愛国心やナショナリズムにも走りかねません。

日本は歴史的に海外からさまざまなものを取り入れて成長した国であります。しかし今

は学ぶ一方ではなく対等に話し、時には日本のよさを海外の人に教えるべき時代になっていると思います。去年 9 月に起きた世界貿易センタービルのテロ事件以来、世の中が急激に変わり、日本のすぐ周りにも懸念する材料がたくさんあります。しかしこうした時代だからこそ、他国の立場やニーズをも視野に入れた相互理解がよりいっそう必要とされるのではないのでしょうか。

この 10 数年、海外に行く日本人も日本に来る外国人も増える一方で日本社会は着実に国際化しています。そしてこの傾向が若者にとって何よりも教育の糧になっているはずです。彼らは教室で習った愛国心ではなく自分の身で覚えた考え方やアイデンティティーを原動力として 21 世紀の日本を引っ張っていくことでしょう。

それでは。